日本聖公会 神戸教区報
神のおとずれ

2025年
３月号

発行所
神戸教区事務所
TEL 078(351)5469
FAX 078(382)1095
https://www.nskk-kobe.org/

発行責任者
司祭　林　和広

印刷所
文明堂印刷所

孤独・和解・召命

執事　ルカ　宮田　裕三

「孤独」という言葉からなにを連想しますか。「寂しい」「悲しい」「かわいそう」「つらそう」ネガティブな言葉がいくつも思い浮かびます。

私が聖職志願をすることになった時、知り合いの司祭から「聖職は孤独じゃないと務まりませんよ」という主旨の言葉をいただきました。私は色々な場面で「孤独の中で生きてきたこと」を告白しています。私の孤独な人生が、だれかの必要を満たしているのかもしれません。

神学校に入学するとき別の司祭からは「過去の自分との和解が必要ですよ」と言われました。苦しみと悲しみと怒りの中で生きてきた自分を見るのは心の底から嫌でした。生きてきた人生そのものを否定したくなることばかりです。セルフカウンセリングのようなかたちで自分の人生をふり返り、嘔吐するような苦しみの中で過去の自分との和解のプロセスを歩みました。

執事按手の準備のためにカトリックの神父と黙想の時を持ちました。互いの信頼の中で日ごろの不満や不平を語り合うこともありました。そのたびに神父は「〝だから〟あなたが呼ばれているのですよ」と確信を持って語られました。

三つの出来事は、私の信仰の中心にある言葉たちです。孤独・和解・召命。これは聖職だけに求められることではなく、キリスト者として生きていくときに自覚的に持ち続けて歩む信仰の中心かも知れません。孤独を受け入れることが出来た時、他者に対する不満や怒りの感情を必要としなくなりました。自分と他者の境界が明確になったのだと思います。不満や怒りの表出は、他者に対する甘えの表出と受け止めるようになりました。自分との和解が出来ると、自分を認めることが出来るとともに、他者を認めることが出来るようになります。他者に対して慈悲を持って受け止めるようになります。これらの事は心理学的に十分説明できる事柄でもあり、信仰がなくても変化を可能にする出来事です。その上で、なぜ信仰者として生きているのかを自問したときに、「〝だから〟呼ばれているんですよ」という言葉が現実味を持って迫ってきます。

イエスの弟子たちは誰も自分から弟子入り志願をしていませんし、熱心な信仰者だったとも記されていません。イエスと出会い、生き方を変えられた人たちの多くも同じです。孤独な人たち、過去に事情のある人たち、そういう彼ら彼女たち〝だから〟イエスに呼ばれて神との和解の道の中で新しい生き方を始めます。

孤独を受け入れることはイエスを受け入れることのように感じます。過去の自分との和解は、無意識にある過去への執着を捨てることであり、聖書の語る自分を捨てることのように感じます。召命を認めることは、神の求めを受け入れることであり、神の愛を受け止めることのように感じます。孤独でありながらイエスが共にいることの喜びと信頼の中で、今という時を重ねていきたいと願っています。

（神戸聖ミカエル教会牧師補）

青年交流会　スキー

クレメント　井熊　大輔
（米子聖ニコラス教会）

一月十二日（日）から十三日（月・祝）に、米子聖ニコラス教会で青年交流会が開催されました。今回は大山でスキーやスノボーを楽しみ、交流を深めることが目的です。十二名の参加者が与えられました。

一日目の夕食は、米子聖ニコラス教会の信徒の方々と共にカニ鍋を食べました。青年同士だけでなく、現地の教会の方々と共に食卓を囲めた恵みに感謝です。教会だからこそ出来る交わりと言っても過言ではないと思います。

二日目は天候にも恵まれ、怪我も無く皆がスキーやスノボーを楽しむことが出来ました。途中で転んでも気にせず、皆がずっと笑顔でいたのが印象に残っています。雪化粧の大山の美しさに心を奪われたのも、一度や二度ではありませんでした。神様が造られた自然の中で、沢山楽しみました。

青年交流会が一般の集まりと違うのは、「共に祈る・礼拝をする」ことだと思います。開会の時、食事の前等に参加者全員でお祈りをお献げします。その時に隣で自分と共に祈る人が居ることは、当たり前ではなく本当にありがたいことだと実感しました。それと同時に今回参加出来なかった青年や、これから出会うまだ顔も知らない青年とも、神様によってつながっているとも感じました。

特に十三日は「成人の日」でした。朝の礼拝の中で、新成人も含めた青年のためにお祈り（祈祷書１２６頁　諸祈祷の青年のため）をお献げしました。今は進学や就職等で地元を離れている青年も少なくありません。進学・就職先の教会に青年が訪れた時には、ぜひ温かく迎えていただけたらと思います。同じ祈祷書で共にお祈りをお献げ出来ます。

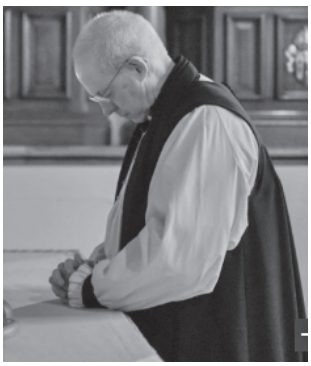
今後も青年交流会を覚えてお祈りいただけたらと思います。また全ての青年が困難にぶつかり、決断する必要のある時に、神様のみ心にかなう道を選ぶことが出来ますようにお祈りいただけたら幸いです。

世界の聖公会の動向
ジャスティン・ウェルビー師、カンタベリー大主教の任期を終える

司祭　ポール・トルハースト
（管区事務所渉外主事）

カンタベリー大主教としての最後の日となった1月6日、ジャスティン・ウェルビー大主教はランベス宮殿の執務室で一日を過ごした。この日は朝の祈りから始まり、昼の聖餐式、そして晩祷と続いた。夕方にはコンプリンと呼ばれる瞑想的な祈りの礼拝に出席し、一日を穏やかに終えた。

ウェルビー大主教は一日を通して、現職のスタッフ、友人、元同僚と会う時間を取った。これらの集まりは、ウェルビー大司教が聖職に就いていた数年間における彼らの献身、支援、協力に対して感謝の意を表す機会となった。ウェルビー大司教は、教会とその使命に対する彼らの貢献に感謝の意を表した。



同日早朝、大主教はランベス宮殿の礼拝堂の祭壇に主教杖を置き、自身の任期終了を象徴する行為を執り行った。

後継者を選ぶプロセスは、現在、王室指名委員会（ＣＮＣ）の指導の下で始まっている。同委員会の役割は、神がこの聖職に召し出していると思われる人物を見極めることだ。世俗的な採用プロセスとは異なり、誰もカンタベリー大主教に応募することはできない。

【３面へ続く】

阪神・淡路大震災三十年を振り返って
―震災を忘れない教会として―

クリストファー　和賀　克公

一九九五年一月十七日午前五時四六分、淡路島を震源とした大地震は起こりました。あれから三十年という年月が経過しました。神戸聖ヨハネ教会は、震災を忘れない教会として復興再建されました。当教会の礼拝堂には、「犠牲者を鎮魂し、大震災を永遠に記録するシンボルにしたい」という中村豊司祭（当時）の思いに姫路市在住のステンドグラス作家、立花江津子さんが共鳴し、描いてくれましたステンドグラスがあります。一部は、平穏な神戸の日常に見られるブルーの海、周りを照らす港の灯台があり、夜の安らぎから夜明けに向かう。二部は、朝を迎え、突然、襲った崩壊による混沌。三部は、再び夜明けを迎え、新しいみどりの風が吹き、人々が手を差し伸べて希望に向かう復活を表す。

震災十五年を機に、当時の状況を改めて伝え、支援してくれた人への感謝の気持ちを表そうと、角瀬克己司祭（当時）の指導により壁画の制作を企画しました。当初、信徒ら数名で描き始めました。角瀬司祭は、「地震の悲惨さや人と人との支え合いを改めて伝えたい。完成した絵を多くの人たちに見てもらい、人のつながりにもう一度思いをはせてほしい」と語っていました。壁画は、コンパネ板（ベニヤ板　縦一・九㍍、横五・六㍍）に三層で構成されています。第一層は、『五千人の給食』の絵でイエス様を中心に、多くの人々が僅かな食べ物を共に分かち合って食べています。人と人の繋がりが実現したのです。第二層は、震災の悲惨な惨状が描かれています。建物の倒壊、火災、高速道路、鉄道の破壊、人々の日常生活は想像を絶する有様です。私たちは、震災という出来事を通して、人と人の繋がりによる大きな力とその大切さを知らされました。第三層は、ヨハネ黙示録に基づいて描かれており、神の国を表しています。神は光り輝いており、私たちを導いてくださいます。神の導きを信じ、希望をもって歩んでいきたいものです。

震災後三十年を迎え、壁画が描かれているコンパネ板も虫食いが散見され、壁画を画像処理し、アルミ板に焼き付ける方法により、永久に保存できるようになりました。二〇二五年一月十七日の震災三十年の礼拝時に皆様にご披露できましたことを嬉しく思っております。当日の追悼礼拝には、聖職者・信徒三十名強が参列し、しめやかに執り行われました。午後には、社会部共催のイベントとして角瀬司祭による講話『教会と地域』が行われました。

阪神・淡路大震災で失われた尊い六千四百三十四名の魂が安らかに憩われますように心からお祈り申し上げます。

（神戸聖ヨハネ教会信徒）

【2面の続き】

カンタベリー大主教のためのCNCは20人のメンバーで構成され、そのうち17人が投票権を持つメンバーである。その中には聖公会の5つの地域（アフリカ、南北アメリカ、中東・アジア、オセアニア、ヨーロッパ）からそれぞれ1人ずつ、計5人の代表者が含まれている。この5人には、少なくとも首座主教1名、司祭または執事1名、信徒1名が含まれなければならない。さらに男性2名、女性2名、および非白人3名が含まれなければならない。また、カンタベリー教区の代表者3名、英国教会総会の代表者6名（聖職者3名、信徒3名）、そして英国教会で2番目に高位の主教であるヨーク大司教も含まれる。

選考プロセスには、カンタベリー教区、英国教会、そしてグローバルなアングリカン・コミュニオンのニーズが満たされるよう、複数の段階が設けられている。

（神戸MtSチャプレン）

鳩だより《敬称略》

祝洗礼

12月5日（木）
ザカリア　川島茂雄
松江基督教会

祝聖婚

2月2日（日）
パウロ　三宅祐二郎
小野ひより
姫路顕栄教会

ご逝去

1月6日（月）
ザカリア　畑猛
明石聖マリア・マグダレン教会

1月20日（月）
ベタニヤのマルタ　津口末子
下関聖フランシス・ザビエル教会

1月23日（木）
ペテロ　松本道雄
米子聖ニコラス教会

1月23日（木）
マリア　北島美香
姫路顕栄教会

山陰伝道区

山陰伝道区合同礼拝・伝道区会

1月19日（日）、米子聖ニコラス教会にて山陰伝道区合同礼拝および伝道区会が行われました。礼拝出席者32名。礼拝後に伝道区会を行い、各教会の現状を分かち合い、2025年の伝道区活動、2025年の予算案について話し合いました。今年は山陰ミッションのルーツである隠岐の島に行き、隠岐伝道を行っていた歴史を学ぶ修養会を企画しました。

４月の教区関係教役者 逝去記念聖餐式

日時　2025年4月3日(木) 午前10：30
場所　神戸聖ミカエル大聖堂
司式　司祭　瀬山　会治
説教　司祭　竹内　宗

どなたでもいらしてください

＊４月の記念逝去教役者

１日	執事	パウロ	中村四朗
２日	司祭	パウロ	鈴木尚夫
２日	司祭	ヨハネ	小南弘
５日	伝道師		岡井ちゑ
７日	伝道師		億川八郎
11日	司祭	パウロ	広瀬輿吉
11日	宣教師	メアリー	サンダー
12日	伝道師		井上トヨ
13日	司祭		荒砥琢哉
15日	司祭	ペテロ	小池耕造
15日	司祭	ジョン	マクドナルド
15日	司祭		山内豊吉
16日	伝道師		鶴野瑛治
17日	司祭		堀六郎
18日	司祭	ヨハネ	桑原一郎
19日	司祭	ジョージ	ストロング
19日	伝道師		高山ゆき
22日	司祭	トマス	入交源治
23日	司祭		村田里
23日	伝道師	マリア・マグダレン	神崎幸子
25日	司祭	ヨハネ	瀬山岩雄
28日	主教	バジル	シンプソン
28日	主教	ジョン	マン

＊逝去年月日不明の方々もお祈りします。

≪主教辞職のお知らせ（公示より）≫

日本聖公会神戸教区　主教　オーガスチン小林尚明師の願い及び神戸教区常置委員会の同意を得た主教の辞職について、第261（臨時）主教会において協議し、下記の通り承認いたします。

記

日本聖公会主教会は、「日本聖公会法規」第12条2項により、日本聖公会神戸教区　主教　オーガスチン小林尚明　師の辞職を、2025年2月5日付で承認し、同日付で退職とする。

日本聖公会神戸教区　主教　オーガスチン小林尚明師の2025年2月5日付け辞職・退職にともない、下記の通り管理主教を委嘱いたします。

記

「日本聖公会法規」第10条1項の定めにより、日本聖公会横浜教区　主教　イグナシオ入江修　師に、日本聖公会神戸教区の管理主教を委嘱する。
任期は、2025年2月6日より次期の神戸教区主教就任の日までとする。
なお2024年7月25日付で同教区の管理主教を委嘱した九州教区ルカ武藤謙一主教の委嘱は2025年2月5日で終了とします。